

女狐と若者

狐が人間と婚して子をもうけるという説話は、中国の「五雜俎」や「呂氏春秋」「元中記」などによくみえる。が、日本版の、恋した男の身がわりぶなって死ぬという「古今著聞集」の純情の女狐や、子までなした仲でありながら、吠える犬におびえて正体をあらわし、心ならずも去っていかねばならなかった狐（「日本靈異記」「水鏡」）の物語などは、ひとしわあわれがふかい。

立ち去っていく女狐に男が「なぜ行くのか。おまえのことを忘れられようか...」...これからも我のもとに“来て寝よ”と叫ぶ。で、狐はそのことばに従って、その後も男のもとに忍んで“来て寝”た。いらい人びとは、その可憐な獣のことを「来つ寝」といったという。

そんな狐交婚譚のなかで、ことに著名なのは熊野街道（小栗街道）に沿った信太の森の葛の葉狐である。関西人にとって、シノダといえばキツネうどんを連想するくらいに、この物語は広く知られている。

その話というのは、こうだ。阿倍野仲麻呂七代の孫で、父の代に没落して阿倍野（大阪市阿倍野区阿倍野）に住んでいた阿倍ノ保名は、家名再興を信太の森に祈願していた。ある日、保名はこの森で、狩人に追われた白狐をたすけた。その数日後、保名は、訪ねてきた美女と心を通わせ、やがてその女とのあいだに一子、童子丸をもうける。が、幸せはながくつづかなかった。童子丸が五歳のとき、眠っているうちに神通力を失って狐の正体をあらわしてしまった葛の葉狐は、

恋しくば尋ねきてみよ和泉なる

信太の森のうらみ葛の葉

と歌をのこして、故郷、信太の森に帰っていく。母を慕って泣く童子丸を背にした保名は、妻の名を呼びながら信太の森にきてみると、以前はみなかった葛の葉が社前いちめん群がり茂っていた。そして、それらの葛の葉が、夫とわが子の声に応えるように、いっせいに葉をそよがせ、泣くがごとく、葉裏をみせてざわめいたという。

保名と葛の葉狐のあいだにうまれた童子丸は、のちに日本随一の陰陽博士、安部晴明となり、令泉、円融、花山の三天皇に仕えて従四位にのぼる。にんげんが草木と語り、獣と共に生きていたころの話である。

この葛の葉伝説は、蟻の熊野詣といわれるほど、おびただしい人びとが熊野街道を往来したころ、一遍上人を奉じる時宗の徒が語り広げたのかもしれない。この説話が熊野信仰とかわりふかいことは、安部ノ保名、晴明がいた地に熊野九十九王子社の阿倍野王子があり、葛の葉狐の信太の地に篠田王子があることをみてもわかる。

信太森葛葉稲荷神社は、JR阪和線北信太駅から西へ百メートルの和泉市葛の葉町にある。この森も、いまは頭上に空がすけてみえるくらい樹がすくない。あかい鳥居の立ち並ぶ落葉の境内に、葛の葉ゆかりの姿見の井戸がひっそりしまっている。

「夜泣きの子には昔から名高い、葛の葉のマジナイ致します」と張り紙のある社務所をのぞくと、老人が二人すわりこんでいた。取材にきたというと、だまって「泉州信太森葛葉稲荷由緒」と刷ったパンフレットをくれた。